

非配偶者間体外受精

岡山大大学院・中塚教授に聞く

卵子提供 国民的議論を

早発閉経などで卵巣機能が低下した女性が、第三者から卵子提供を受ける「非配偶者間体外受精」。国内では明確な規定はなく、関連学会が自粛を求める一方、健康な卵子の提供を募る民間の

「卵子バンク事業」が始動した。課題は多岐にわたり、早急なルール作りが必要だ。全国規模の生殖医療調査を実施した岡山大大学院保健学研究科の中塚幹也教授(生殖医療)に聞いた。

「非配偶者間体外受精の現状を知りたい。」

「我々が昨夏行った

調査では日本産科婦人科学会登録医療機関1157施設のうち、415施設が回答。第三者からの卵子提供を尋ねたところ、早発閉経患者は9施設、



非配偶者間体外受精について話す中塚教授

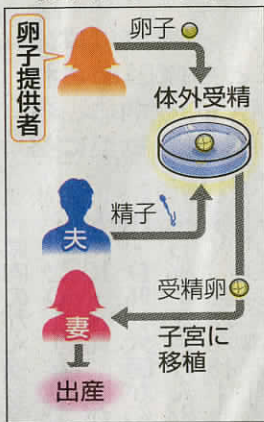
悪性腫瘍5施設、染色体異常で卵子がないターナー症候群は2施設が実施していた。ただ、提供者が親族なのか、他人なのかは不明だ。

「倫理面からの問題はないのだろうか。」

「卵子提供について、向にあった。不妊に悩

り、不妊治療の医療機関の方が理解を示す傾向にあった。不妊に悩

第三者からの卵子提供による出産



「これまでは第三者から提供された卵子を幹旋し、患者を海外渡航させる団体があった。一方、国内でも非公表でごく少数の医療機関が、第三者からの卵子提供で不妊治療を

行っていた。個人的見解だが、これを容認する流れは止まらないだろう。いずれにしても国民的議論が必要。今後、一般の方々への意識調査を行う予定で、その議論の際には私たちが集めたデータが役立つ」

「第三者提供ではない、健康な女性が20、30代のうちに採った卵子を保存しておく方法もあると聞く。」

「第三者提供ではない、健康な女性が20、30代のうちに採った卵子を保存しておく方法もあると聞く。」

「今はパートナー

「体外受精、凍結保存技術など不妊治療は近年、目覚ましい進歩を遂げた。『第三者からの卵子提供』『卵子の凍結保存』『凍結保存していた夫の精子を死後に体外受精して妊娠する死後生殖』。いずれにしても倫理的に難しい問題であり、慎重に議論を進めるべきだ」

民間バンク始動 流れ止まらず

「『仕事がない』『仕事がない』『仕事がない』という女性が将来の妊娠に備え、卵子を凍結保存する方法だ。我々の調査では国内9施設で実施例があり、6割を超える医療機関が倫理的に問題なしとした。だが、凍結保存した卵子を利用した生殖医療における高齢出産でも、妊娠高血圧症候群や分娩時の異常といった医学的リスクを伴う。加齢とともに卵子も『老化』することなど、妊娠への正しい知識を若者に知ってもらうことが最も重要だ」

コラム

卵子提供による不妊治療 第三者から健康な卵子をもらい、夫の精子と体外受精させて妊娠、出産を目指す治療。

「これは第三者から提供された卵子を幹旋し、患者を海外渡航させる団体があった。一方、国内でも非公表でごく少数の医療機関が、第三者からの卵子提供で不妊治療を